2018年10月04日 本紙 特集 011頁　(C)神奈川新聞社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

短編小説

第48回
神奈川新聞
文芸コンクール
最優秀

二十三歳の伝令

池田 洋一 作

講評

「二十三歳の伝令」は、何の衒いもない言葉の力に圧倒された。無骨で飾り気のない文章も逆に好感を持てた。おそらく自伝に近いものなのだろうが、その鮮烈な思い出を消化し、物語として提示できた点は評価に価する。

（審査員・伊東　潤）

また兄の夢を見ました。

夢の中では年を取りませんから、何十年もたった今も兄は二十三歳のままです。今日も風のように森の中を駆けていきました。

目覚めると、窓辺に桜の花びらが舞い込んでいます。そのせいか、その後も兄の思い出が蘇ってきました。母と二人で兄の遺骨を引き取りに行ったのも桜の季節でしたから。

桜といっても、昭和二十二年の春のことですから満開の桜並木などありません。川沿いの所々に、空襲を逃れたものが花を開いているのです。それを母が立ち止まって見上げるものですから、私も真似をして首を大きく反らせるのでした。

でも母はきっと桜を見たかったのではありません。少しでも兄の死の確認を遅らせたかったのでしょう。母はずっと兄の死を信じていませんでしたから。

兄は憲兵でした。父から、憲兵というのは軍の警察に当たるもので、容易くなれるものではないと聞いていました。兄は父と母にとって自慢の息子だっただけでなく、親類はもちろん、学校や近所でも評判の秀才でした。二回り以上も年下の私にとっては、兄弟というより尊敬してやまない特別な人でした。

昭和二十年八月に戦争は終わりましたが、兄は帰ってきませんでした。ただ、戦死の公報も来なかったので、必ず生きていると家族で毎日のように話していました。実際、戦死したはずの人がある日ひょっこり帰ってくるということが少なくない数あったのです。

ところが戦後二年も過ぎて国から通知が届きました。それには、遺骨を引き渡すから指定の寺に来るようにとあり、私達はついに諦める時がきたと思うよりありませんでした。

四月にしては暑い日でした。私は坊主頭に学生帽でしたが、脱いでも暑い、被っても暑い。なのに母は何だか青白い顔をして汗もかいていないのです。不思議な気がしました。

ようやくお寺について係に通知を見せると、奥から白木の箱が運ばれてきました。震えるような手つきで受け取った母が、あれ、という顔をしました。そして私に持ってみろと渡すのです。軽いだろうと言うのです。十歳を少し過ぎたばかりの私に骨の重さなんて分かるはずがありません。でも母が言うから私もそんな気がして、本当だ、軽いと言いました。開けてみれば分かるのに、母は怖かったんだと思います。

それでも結局本堂の隅で開けてみることにしました。驚いたことに、中には紙切れが一枚入っているだけでした。

『日本陸軍軍曹　水野一郎』

もちろん母は直ぐに係の人に見せました。これはどういうことですかと。そういうこともある、と言われました。答えにも何もなっていません。もう一人の係が気の毒そうに、遺骨を持ち帰ることが出来なくて毛髪とか爪が入っていることもあるんだと言いました。でもそれだったら死んでしまったと分かるじゃないですか、この子の場合は何もないんだから死んだかどうか分からないってことじゃないですか、母はそう言って食い下がりましたが、無駄なことでした。

帰り道、母は何度も何度も言いました。生きてる、あの子は生きてる、と。

結局、私達家族が最後に兄に会ったのは昭和十九年の九月ということになります。満州の部隊にいる兄から今度みんなに会えるという手紙が来て、それはそれは喜んだものです。

部隊の移動に当たって東京に寄る任務を与えられた。その夜少しだけ時間が空くから家族で食事をしようというのでした。

さあそれから母はあちこち走り回り、何日もかけて砂糖やら餅米やらを手に入れてきました。当日になると母は朝からお菓子を作り、赤飯を炊きます。私は待ちきれずに何度もまだ行かないのと言っては何度も父に叱られました。夕方になってようやく父母と姉と私の四人、兄に言われた赤坂の料亭に行きました。父が、本当にここかと入るのを躊躇したほど立派な構えの店でした。

通されたのは十何畳もある大きな部屋で、兄は既に部屋で待っていました。二年ぶりに会う兄は、私達が皆驚いたほど顔つきも体つきも変わっていました。家族を見て微笑んでいても眼光は鋭く、元々痩せ型でしたがさらに引き締まって精悍な感じを受けたものです。

姉は、兄からきれいになったと言われ嬉しそうでした。私も二年の間にかなり背が伸びていたのに、しっかり勉強してるかと訊かれただけで、ちょっと面白くありませんでした。

でも、私の機嫌などすぐ直りました。何しろ次々に運ばれてくる料理があんまり豪華で目が回るようだったからです。お刺身に天ぷら、鰻の蒲焼きだの茶碗蒸しだの、見たことのない料理もたくさんありました。ご飯はもちろん銀めし、真っ白なご飯です。今思い出しても、あの頃よくあれだけの料理が出せたものだと思います。

「やっぱり憲兵さんは違う」と父が言い、私もそういうものかと感心しました。とにかくすごいすごいと言い続けで、はしたないと姉に叱られました。でも料理を前に姉のおなかがぐうと鳴ったのを私は確かに聞いています。

大人たちが乾杯し、兄に「遠慮せず食べなさい」と言われて、私はむしゃぶりつくように食べました。本当に旨くて旨くて。

なのに兄は目の前の料理には手を出さず、母の赤飯とお菓子を「母さんの料理はおいしい、おいしい」と言って食べています。私は、兄はいつもこういう豪華なものを食べているからだろうと、羨ましく思うばかりでした。

兄は、私達の暮らしぶりや知り合いの様子などを聞きたがり、父や母がいろいろと話して聞かせました。父が内地の状況をあまり悪く言わないようにしているのが子供心にも分かりました。姉も徴用先で頑張っていることを話しましたが、いつものように辛いとは言いませんでした。私はというと、その間もただひたすら箸を動かしていたように思います。

しばらくして、みんなで久しぶりにおなかが一杯になったと言い合っていると、兄がお風呂を用意してもらっているから入ってきたらいいと母と姉に勧めました。私もああいうところのお風呂に入ってみたかったのですが、

「次郎はまだ母さんと入りたいのか。いいからここにいろ」と言われて、仕様がなく残りました。

三人になると、急に兄が居住まいを正し、

「お父さん」と改まった声を出しました。

父は何かを感じたように、兄に向き直りその顔をじっと見つめました。私も何だか緊張してそっと箸を置いたのを覚えています。

「私は憲兵を辞めたいと思っています。今日はそのことをお父さんに許していただきたいのです」

びっくりしたなんてものではありません。私は締まりなく口を開けて二人を交互に見ていたような気がします。

「どういうことだ。ただ許せと言われても訳が分からん」

兄は、一度自分の膝元に視線を落とし、それから意を決したようにもう一度父を見て、その後はずっと父から目を逸らすことがありませんでした。

「私は人を殺めました。支那人を斬ったのです」

「えっ」と父が小さく声を発しました。「なぜ、また」

「スパイの容疑がかかった男でした。上官の命令で斬らされたのです」

それを聞いて、父がふっと息を漏らしたのが分かりました。

「そういうことなら、お前の立場では仕方のないことだろう。戦時だし、しかも上官の命令なら、やらない訳にはいかないのじゃあないか」

「だから、嫌なのです。憲兵であるがために無抵抗の人間を斬り殺さなければならなかった。もし、憲兵でなかったら命じられることのない役割でした。私は、もうこんなことはしたくないのです」

父は、うーんと唸って、それから沈黙が続きました。しばらくたって父が口を開くまで、私はほとんど息ができませんでした。

「今さらお前が憲兵の身分を捨てたところで兵隊であることに変わりはない。戦争が終わらない限り、敵を殺すことはあるだろう。それがお国のためではないか」

「分かってもらえませんか。戦地で互いに武器を持って戦うならまだしも、相手は刃向かうことさえ出来ない、その男を、私は」

兄のその先の言葉を、父が「今一度、」と甲高い声で遮りました。

「一郎、今一度お国のためと思って頑張れ」

兄は青ざめた顔で父を見ていましたが、急にその肩から力が抜けたように見えました。

「分かりました。聞いていただいて有り難うございました」

兄はそう言って頭を下げた後、しばらく俯いたままでいました。私は何だか胸が苦しくてならなかったのですが、我慢して兄を見つめていました。こんな兄を見るのは初めてなのです。でも、やがて顔を上げて私を見た、その時には兄はもう穏やかな顔になっていました。

「次郎、嫌な思いをさせたが、お前にも聞いてほしかったのだ。私がどういう人間か、それから、戦争とはどういうものか、知ってほしい」

「こいつにそんなことを言ったって。こいつはまだ子供だ」

父はそう言って私のことを馬鹿にしたのですが、私はその言葉に救われた気がしていました。兄に応える言葉が一言も浮かんでこなかったからです。

「次郎、お前にこれをやろう」

そう言って、兄が私にくれたのは革の財布でした。黙って受け取って中を見ると、五〇銭銀貨と鍵が一本入っています。驚いて兄を見ると、兄は何も言うなというように小さく顔を振りました。鍵には覚えがありました。兄が大事にしている文机の引き出しの鍵です。そこに何を入れているのか、何度聞いても兄は教えてくれなかったのですが。

さっきの話を母さんと姉さんにはするな、心配するからと父が私に囁いたところへ、二人が帰ってきました。母が兄にお礼を言い、姉はああいいお湯だったとわざとらしく私に言いましたが、私が言い返さないので拍子抜けしたようでした。

皆が揃うと兄は何もなかったようにこう言いました。

「戦争はいつか終わる。終わったら、私は郷里の秋田で米作りをして暮らそうと思っています」

それならなぜ大切な鍵をまるで形見のように私にくれるのか、と不思議に思いました。思えば、兄は叶わぬ夢を語ったのでしょう。

「今日は久しぶりにみんなに会えて良かった。お父さん、一つ歌っていいですか」

兄はこの歌が好きなんだと言って、秋田の民謡を歌いました。長持歌という、娘を嫁に出す時の唄です。いい声でした。

兄は歌い終わると姉に向かって

「本当はお前がお嫁に行く時に歌ってやろうと思っていたんだが」と言いました。

瞬間、母がはっとした顔をしました。兄が慌てて「俺が帰る前に嫁に行くかも知れないからな」と言い足しました。

「兄さんみたいな人でなきゃ嫌だな」と姉が甘えた声を出したせいか、母は言葉をのみ込んだように見えました。父も母の視線を誤魔化すように

「こいつ、俺が音痴だからと言って、父親の代わりをする気だな」と言い、笑いが起きましたが、母だけは笑っていませんでした。

店を出ると皆で駅まで歩きました。途中、不意に兄が立ち止まって

「夜空はどこで見ても同じだなあ」と言うので、私も空を見上げました。「次郎、降るような星空だ」と言った兄の声が今も耳に残っています。

別れ際、明日には新たな戦地へ立つと言う兄に、母はどこへ行くのか尋ねました。それは言えないのです、と兄が言ったその瞬間、母は両手で兄の腕をつかんで激しく揺さぶりました。まるで幼い子供がいやいやをするような感じでした。

今でも兄のことを考えると、決まってあの夜のことが思い出されます。

あの時、兄が父に憲兵を辞めたいと訴えた時、私は何を考えていたのだったか。もし兄が憲兵を辞めたら、もう二度とこんな美味しいものは食べられないのだなと、そればかり考えていたのです。それを思うと今でも自分で自分が嫌で嫌で堪らなくなります。どうして父に兄さんの言う通りにしてあげてほしいと言わなかったのか。もちろん私がそう言ったところで、父の答えが変わることはなかったでしょう。でも、私にもしその一言が言えていたら、私のその後の人生が違っていたような気さえするのです。私をわざわざあの場に残して話をした兄の気持ちを考えると、今でも胸が抉られるように痛みます。

兄の遺骨を受け取りに行った後も母だけは兄の死を信じませんでしたが、その年の暮れになって兄の上官だった人から手紙が届きました。巻紙のえらく長い手紙でした。読み終わった父から手紙を渡された母は、目を通している内に泣き出しました。父は母から目を逸らし、私に教えてくれました。

「あの後、兄さんの部隊は南方の戦線に向かい、セブ島というところに上陸したのだそうだ。そこでついに米軍と決戦になった。アメリカは海上から総攻撃をしかけてきたが、その物量たるや凄まじく、幾つも山が消し飛んで山でなくなってしまったそうだ。兄さんは奥地の本隊にいたのだが、海岸で応戦している部隊の様子は分かる。ついに上官が撤退を決めたがもう無線も通じない。その時、兄さんが伝令を買って出て、止めるのも聞かず飛び出していったそうだ。そしてそのまま戻らなかった」

私は、まだ見たこともないセブ島の森の中を兄が風を切るように駆けていく姿を思い浮かべていました。

父はしばらく目を閉じていましたが、最後にこう言いました。

「あいつらしい最期だ。兄さんは南の島で名誉の戦死をしたんだ」

父の言葉に、母は、

「二十三で死んで何が名誉ですか」と呻くような声を出して一層激しく泣きました。

金子　郁夫　画

作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としています。佳作作品は順次掲載します。

次回は5日の予定